

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 22 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381223

研究課題名(和文) ドラマを活用したコミュニケーション力と「生きる力」を育む英語教育：指導案の作成

研究課題名(英文) Incorporating drama techniques into English education to develop zest for living

研究代表者

塩沢 泰子 (Shiozawa, Yasuko)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：90265504

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：顕著な成果を上げたのは次の2つのプロジェクトであった。毎夏、約15時間の英語ドラマワークショップを実施し、複数大学より延べ130名の学生が参加した。種々の即興活動に始まり、朗読、小断、グループによる一定のテーマに沿った英語寸劇の創作・発表を主活動とするもので、指導には筆者ら、ならびにプロの役者があたった。質問紙調査により、参加者は「社会人基礎力」で定義された「前に踏み出す力」や「チームで働く力」が特に高まったと認識していることが確認された。また、プロによる英語劇上演と事前ドラマ活動も実施したが、聴衆が自然に言語を獲得し、学習動機を高める可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Main results were twofold as follows: The authors conducted 15-hour drama workshop camps every summer, with 130 participants from several universities. The workshop consisted of drama activities such as improvisation, readers' theatre, and creative drama. The themes varied from college life to social issues. The participants were observed to be actively involved in the activities. The pre-and post- survey revealed that the students perceived their basic social skills significantly improved through the workshop. We also invited professional drama performers focusing on EFL/ESL students every year. Watching their performance along with pre-performance workshop proved to be effective for helping the learners acquire the language as well as motivating them. We also found a parallel between language education and actor training.

研究分野：英語教育、ドラマ教育

キーワード：ドラマ 英語教育 演劇 ワークショップ 社会人基礎力 協調的問題解決力 DIE TIE

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進み、国内外で英語使用の頻度や必要性が高まってきた。文科省も英語教育強化を目指し、H23 年度から小学校高学年で英語を必修化した。中学・高校の学習指導要領も改訂され、学習内容の増強・深化が図られてきた。

一方、英語コミュニケーション力を支える母語のコミュニケーション力も、直接対話力や共感力、表現力に欠ける問題が指摘され、対人関係に苦手意識を持つ中高生は増加傾向にあり、コミュニケーション力や人間関係構築力の不足はいじめなど社会問題の遠因とも考えられた。

ドラマ教育では様々な役割、立場を疑似体験し、コミュニケーション力や人間関係構築力を養成することが期待される。そもそも「コミュニケーション」とは言語によるやり取りのみならず、非言語による意思疎通や、自己理解、他者理解、共感など異文化理解力を含む総合的能力であり、ドラマは真のコミュニケーション力を育む格好の方法と期待される。新学習指導要領でも音読が重視され、ドラマや朗読が推奨されているが、実際の指導に生かすには手法の研究が必須である。

日本においては竹内敏晴が、芝居の練習と上演を通しての生徒の変容を元に演劇の効果論を論じており、近年では渡辺淳や小林由利子らが教育方法としてのドラマを実践し、紹介している。しかしこれらは母国語によるものであり、外国語教育へのドラマの活用は十分ではない。

2. 研究の目的

現代の日本に必要な英語コミュニケーション力と「生きる力」を同時に育むと期待されるのがドラマ教育である。様々な役割、立場を疑似体験するドラマはコミュニケーション力や人間関係構築力を養成すると期待される。

特に学習者が練習から上演までのプロセスを通して、相互に高めあう人間関係を構築し、主体的、自律的に学習に取り組むところはドラマ手法ならではの特徴で、これらの力は英語コミュニケーション力に加え、「生きる力」としてその後も学習者の精神的な基盤となりうる。このようにドラマ教育は革新的な総合的教育法といえよう。

しかし、これらの効果は経験や観察から提唱されているものであり、理論的・実験的な裏づけは少ない。また様々なドラマ手法の系統化や、日本における学習指導要領に沿った小・中・高の英語教育現場への具体的な導入方法や指導案は確立されていない。

本研究は全人的な成長を促しつつ、英語コミュニケーション力を高めるドラマ手法の開発と効果の検証を主目的とした。

3. 研究の方法

本研究は次の4つの方面からアプローチ

した。

調査・視察：諸外国でのドラマを活用した教育現場を訪問し、観察、インタビューを実施。ドイツに本拠地を置く英語学習者対象の劇団を視察し、役者の練習のプロセスの観察・録画、代表へのインタビュー、現地での教育機関との連携などを調査した。学会で報告。

授業実践と中間報告：著者らの担当授業（専門ゼミナール、夏合宿を含む）でドラマ手法を導入し、アンケート調査やビデオ観察を実施。統計的な分析も行った。経過や結果を学会報告

専門家招聘と教員研修：著者らの大学での教員ならびに学生対象の研修会に英語学習者対象の劇団を毎年招聘し、著者らと協働でワークショップを企画運営した。

普及・還元：小・中・高の教員免許更新講習会で毎年ドラマ手法を紹介、導入し、普及を図った。また、科研で作成したドラマ手法による即興活動の指導ビデオを希望者に配布した。

4. 研究成果

顕著な成果を上げたのは次の2つのプロジェクトであった。

毎夏、約15時間の英語ドラマワークショップを実施し、複数大学より延べ130名の学生が参加した。種々の即興活動に始まり、朗読、小断、グループによる一定のテーマに沿った英語寸劇の創作・発表を主活動とするもので、指導には筆者ら、ならびにプロの役者があたった。質問紙調査により、参加者は「社会人基礎力」で定義された「前に踏み出す力」や「チームで働く力」が特に高まったと認識していることが確認された。これはループリックを使った自己評価をもとにしており、ワークショップ前後で統計的に有意な差が見られたのは大いに注目すべきである。

また、プロによる英語劇上演と事前ドラマ活動も毎年実施したが、聴衆が自然に言語を獲得し、学習動機を高める可能性が示唆された。そして、英語劇の台本をもとにした高校生・大学生を主対象としたドラマ手法を活用した社会問題を考察するアクティブ・ラーニングを取り入れた英語学習テキストを執筆中である。

さらに、毎年の教員免許更新講習会で3年間で延べ120名以上の教員にドラマ手法を紹介し、実際に体験してもらうことにより、この手法の普及を行ったことも成果といえよう。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)
Yasuko Shiozawa & Miho Moody “Enhancing EFL Learning in College through Performance Festivals - A Holistic

Approach” Scenario 2017, Vol 10-2, pp. 49-64.

概要：20年以上続けている大学生対象の英語のパフォーマンス大会の意義を論じたもの。順位を競うのではなく、プロセスと相互評価を重視するもので、大会へ向けての指導と当日の相互評価は総合的な外国語習得のアプローチともいえる、と論じた。

草薙優加 「共用英語教育に求められる学びとは」日本国際教養学会第5回全国大会プロシーディングズ 2016, pp.1-3.

〔学会発表〕(計 6 件)

Yasuko Shiozawa, Miho Moody, Mariko Yoshida “Think Deeply about Peace and Friendship through Drama Activities” (Workshop) JACET (大学英語教育学会国際大会) 2014, 8, 31 @ 広島市立大学

概要：ドラマ手法のうち、ホットシーティングに焦点を当て、「桃太郎」の登場人物を記者会見する手法により、平和や友好について自然と洞察を深めることに気づくワークショップを実施した。

塩沢泰子、平田オリザ、原口友子 「学習者と教員が共に生きる表現言語活動」国際表現言語学会シンポジウム 2014, 12, 14 @ 文教大学

概要：このシンポジウムは本学会の中心で、前日の英語パフォーマンス大会の映像を見せながら、その目的や意義を討議した。このような表現言語活動を一堂に会して行い鑑賞し合うことは学習者のみならず、教員にとっても豊かな学びの場となっていることを確認した。今後の言語教育でより重視すべき点である。

Yasuko Shiozawa, Aiko Saito, Yuka Kusanagi “Cultivating Fundamental Competencies for Working People through Drama in English Education” 2016, 4/23 International Conference on English Education @ Shih Chien University, Taipei

概要：2015年度の夏のドラマワークショップ合宿の概要と成果を紹介し、台湾の小・中・高・大の教員に即興活動を体験してもらった。右脳と左脳が結びつくことにより、言語獲得が助けられるのを実感したという感想が述べられた。

Yasuko Shiozawa, Yuka Kusanagi “Drama in Education: a Panacea for Basic Social Skills?” JACET (大学英語教育学会国際大会) 2016, 9/1 @ 北星大学

Yasuko shiozawa, Aiko Saito, Yuka Kusanagi “Drama in Education: Building Relationship through Creating and Showcasing Creative Drama” SIETAR (異

文化コミュニケーション学会) 2016, 9/18 @ 名古屋外国語大学

塩沢泰子、齋藤安以子、草薙優加 「英語学習者対象の出張劇団 “White Horse Theatre” 視察報告」IAPL (国際表現言語学会) 2016, 10/1 @ 城崎アートセンター

概要：2015年度の標記の劇団の視察により、劇鑑賞が言語獲得にいかにか効果的であるか、また役者の練習過程ならびに役者と演出家の関係に生徒・学生と教員との関係との平行性があることを指摘した。また、劇鑑賞の前後にワークショップを行うことにより、より言語獲得がスムーズになり、言語材料の内在化も進むことを示唆した。

〔図書〕(計 2 件)

塩沢泰子「私たちの国際学の学び」第8章 新評論 2015

概要：高校生・大学生を対象としたコミュニケーションの諸相について述べたものである。コミュニケーションが言語だけでなく、声の高さや話す速さ、さらには非言語と呼ばれるアイコンタクトや姿勢、相手との距離など様々な要因が関係することを論じた。また、言語の社会的、文化的な側面にも触れた。

塩沢泰子 「知的道具としてのドラマ」(「世界と未来への架橋」第6章)創元社 2017 pp. 204 - 224

概要：ロールプレイや即興、さらにはディベートやディスカッションをも含む、ドラマ手法がコミュニケーション力を養成するだけでなく、思考力や批判力をも培う可能性について論じた。さらには演じることは、心を開放したり、人々をエンパワーする、という社会を変革する手法にもなりうることも指摘した。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

White Horse Theatre の上演劇をキャンパス限定の YouTube に載せ、学生がアクセスできるようにした。また、要所要所にマークをつけてターゲットの場面へのアクセスを容易にした。

6．研究組織

(1)研究代表者

塩沢泰子 (SHIOZAWA, Yasuko)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：90265504

(2)研究分担者

齋藤安以子 (SAITO, Aiko)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：60288967

草薙優加 (KUSANAGI, Yuka)

鶴見大学・文学部・教授

研究者番号：50350335

(3)研究協力者

Peter Griffith

White Horse Theatre・代表

Eucharía Donnery

湘南工科大学・准教授